

春季号

# Y-MOT ネットワーク通信

Vol. 3

(山形大学大学院理工学研究科ものづくり技術経営学専攻)

## 『この地域の“ものづくり”と産学連携に思う』

特別寄稿 (社)米沢工業会 理事・米沢支部長 工藤 亮介



《(社)米沢工業会について》  
山形大学工学部は、前身を米沢高等工業学校として明治43年に開学、今年が創立100周年を迎えます。卒業生・修了生・教職員からなる米沢工業会の会員も二万八千余名を数え、山形大学工学部が掲げる「国際的な技術者の育成と研究・研究開発と技術支援を通じた社会との連携」を側面から支援する同窓会組織です。

「ものづくり」における絶対的な課題として次の3つがある。

- ① 同じモノならどこよりも良く、安く、早くつくる。
- ② 同じモノでも他社とは一味違う、特化した付加価値を高める。
- ③ 固有技術(コアコンピタンス)を基に、

新しい分野、商品づくりを志向する。

①は言うまでもなくQ、C、Dを指すが、近年、これは技術・製造だけでなく、「一貫通貫」の如く受注から出荷までの一連するすべての関係部署において、徹底したムダ・ムリ・ムラの排除が要求されてきている。

②は割愛しよう。

③は③である。確かに利益、企業体質等の劇的な変化をもたらす可能性を秘めたものではあるが、それだけに非常にハードルが高く、中小が自力で成し遂げるのは極めて稀であり、そのシーズ部分を大学に求めるのが産学連携であろう。

過って自分は産学官交流を産産、産学、産官交流と3分し、直接一般消費者を持たない我々は産産交流が第一、産学交流は産産交流のポテンシャルを高めるもの、産官交流はその効率を高めるものと論ずる一方で、産業集積度の割にはこの地域の、特に大手企業の山形大学工学部に対する関心度が低いと報じたことがある。

これはこれらの企業のトップスが上記の①や②を経営の最優先事項とする余り(当然ではあるが)、次いで任期中の大きなリスクは避けたいが為か産産交流のポテンシャルを高める必要性を感じない、あるいは感じようとならないことが関係しているのではと思うところによる。

昨今産学連携は大学側からの働きかけが強まっているが、大学はこの地域の前述の特質を認識することが必要であり、また企業はポトムアップ、ミドルアップによる産学連携を目指し、若手・中堅技術者の目をもっと地元大学に向けさせることが必要である。

そして何よりも技術者自身、如何に前記①と②項に忙殺されようとも、その中で少なからず③項の意識の涵養と具体的な行動が重要と考える。

6年目を迎える山形大学工学部のMOTと、Y-MOTネットワーク(OB会)の存在に大いに期待したい。

この春、MOTの食品コースを修了。ご両親とともに営む小林豆腐店は、何とお豆腐で特許を持っていらして、そのお豆腐から様々な加工品が生まれています。

お豆腐も小林さんのお人柄そのもの、やさしくておいしい味でした。桜とうふやサクランボとうふなど季節毎の特別なものも、運が良ければ特別にお分け頂けるそうです。

書道6段、洋楽のロックが好きなマスターのいるお豆腐屋さん。今後の展開が楽しみです。

小林豆腐店連絡先: 南陽市長岡628  
TEL: 0238-43-2615  
(インタビューア: 黒田三佳編集委員)



「コーヒープレックでこんにちは!!」  
小林 光弘さん MOT 第四期生



《おめでとう御座います!!》

3月21日(日)、工学部及び理工学研究科の平成21年度学位記授与式が開催されました(学士654名、修士295名、博士13名の合計962名)。

我がMOT(大学院理工学研究科ものづくり技術経営学)の皆さんも、無事に晴れ姿で、当日を迎えることができました。二宮級長さん、とりまとめご苦労さまでした。皆様、おめでとう御座いました!

## 『私とMOT』 シリーズ編

MOT三期生 (株)ソルテック 浅間 秀藏



### ・MOT入学の動機は？

初めは、1期生OBの渡辺毅様からの勧めと、産学交流会の場で高橋幸治教授から誘いを受けて、「学生時代は不良でビリでしたが」と返事したところ「俺が何とかする」と言うことで乗ることになりました。当時還暦を迎えるに、退職後のセカンドキャリアのツールにしようとして考えましたが、その後色々な事情がありまして現役のツールとして使っております。  
 ・「家族の反応は？」

妻は自分の過剰な性格の反面、定年で仕事が無くなったりと横着で怠け者な面も併せ知っておりましてので大賛成。ついでに学部へ申込用紙を届けてくれました。しかも忘れていて、締切日前日の記入でしたが、近所で良かったです。気がつけば次男も今MOT現役です。上手く伝染したかも知れません。

### ・経営者としてのMOT実践事例は？

やはり在学中、親会社の倒産が重なったことです。継続の危機が発生して野長瀬教授と「相談した時の答えは、そのままの体験を修論テーマにしたらどうか」との明確さにむしろ開き直りができました。その後不思議に講義に集中出来ましたし、体験を客観視できました。我々の民事再生も今年の5月で明けますが、MOTの中から倒産の総括をした想いです。それと確かに経験学は基本ですが、困難な状況下や或いは、日常の事象に対しても時間と空間の整理により、経営価値を最適化し、更なる志向を組み直すサイクルはMOTならではの思っています。もう10年早く出会っていただいても思いました。起業家や承継者は案外基本的な部分で苦労しているかも知れません。遠回りしてでも学んで頂きたいルートであると信じております。

### ・今後のMOTに望むことは？

「事業仕分け」など公的機関も試練を受ける時代ですが、MOTであるからこそ強く成長すべきです。そして魅力あることが肝心です。来るべき時期にMOTからの発信が多く地域の振興し、世界に人材を配置したと評価を受けることが目標です。その為にキャンパス内の結束は当然ですが、OBや地元更に広域社会や企業との枠を超えた相互連携が成功要因になります。交流に時間をかけて世界に通用する「愛」と「義」を育む理想的な存在として地域に根ざすべきです。

### ・後輩へ一言

工学部入り口の石碑には「青春とは時間の長さではなく、心の在りようだ」とサミュエル・ウルマンの詩が彫られてありました。MOT流に言うなら起業や再建に出遭った時、或は通常の職場問題に対しても、経営精神の投入は早すぎることも遅すぎることありません。気がついて行動開始したときが自分の青春バージョンだと思ってください。

### 「もっとみらい」コンソーシアム定期総会開催

「もっとみらい」コンソーシアムの第一回定期総会とシンポジウムが、3月11日(木)東京第一ホテル米沢において開催されました。  
 これは山形大学大学院理工学研究科ものづくり技術経営専攻が、平成20年から経済産業省・文部科学省の共同委託事業である「アジア人財資金構想」として取り組んでいるプロジェクトです。このプロジェクトでは、アジア各国から優秀な留学生をリクルートし、大学院MOT専攻において高度な専門教育と技術経営学に関する教育を実施するとともに、日本に関連する教育(日本語・日本ビジネス・日本事情など)を行うものです。  
 大学院を修了した留学生は卒業後に東北地域の企業に就職し、企業の海外進出や市場開拓、海外への技術移転や事業展開において中核的な役割りを担うことを目指しています。

現在、このアジア人財コースには9人の留学生が在籍しており、当日は4人の学生が流暢な日本語で成果発表を行いました。少子高齢化が進行する日本なかで、地元企業・地方自治体・大学等が連携し、外国人留学生が日本の企業で働くためのサポート機関として、また地域にとって有能な国際人財を活用する仕組みを創り上げる機関として設立されました。  
 山形県や東北地域のものづくりの国際競争力強化に向けた取り組みをこれから展開します。



### MOT事務局便り

MOT事務局より大学の動きやMOT専攻に関わる情報をお知らせ致します。

・松田 修教授が、4月よりMOT専攻長に就任致しました。  
 尚、副専攻長は高橋幸司教授が引き続き御担当されます。詳細はホームページをご参照ください。

(MOT事務局)

### 《編集後記》

M-2の皆様、御卒業おめでとうございます。これからは、是非MOTの修了生として学んだことや人との出会いを生かし、それぞれの立場での御活躍されますことを期待致します。経済環境もまだまだ未回復な状態ですが、ピンチをチャンスに切り替えて、前向きな心で頑張りましょう！

また会員の皆様も、是非新しい期のスタートにあたり、新たな進化を求めて邁進しましょう！Y-MOTネットワークの活動も地道に継続したいと思いますので御協力下さい。

(編集委員一同)